

論文

ライ麦畑ではげまして — 『ライ麦畑でつかまえて』と励ましとの 相関性に関する一考察 —

関 戸 冬 彦

The Encourager in the Rye
— A Study of the Relationship Between *The Catcher*
in the Rye and Encouragement

SEKIDO Fuyuhiko

The main purpose of this paper is to examine the relationship about the catch and the caught in *The Catcher in the Rye*. Especially, the relationship between Holden and his little sister, Phoebe, will be examined. First, the story and their characters will be addressed. Second, based on the relationship, their unique phenomenon will be revealed. Finally, it will be discussed that such phenomenon is similar to the relationship between the encourage and the encouraged. At this point, this paper is an experimental trail to connect literary studies and psychological studies.

はじめに

本稿は戦後アメリカ文学の金字塔とも呼びうるJ.D.サリンジャーの傑作小説、『ライ麦畑でつかまえて』をもとに、そこで展開される「つかまえる」「つかまえられる」の関係性、具体的にはホールデンとフィービー、を精査しながら、その延長線上で「(人を) はげます」「(人から) はげまされる」とはどういうことか、つまり「励まし」とは何か、についても思考を巡らす。これは、文学研究でありながら、心理学的側面における研究をも含む、実験的な試みである。まずは『ライ麦畑でつかまえて』（以下『ライ麦』）の主要登場人物であるホールデンとフィービーに着目して、その展開とそれぞれの特徴を記す。その後、両者の関係性から起きている主客逆転のような現象を明るみにしたい。そして、それがひいては「はげます」「はげまされる」という事象とパラレルになっていることを検証し、こうした事象と作品理解とのつながりについても言及する。

1 『ライ麦』におけるホールデンとフィービー

『ライ麦』の物語を非常に簡潔にまとめるとするならば、語り手であり、主人公であるホールデン・コールフィールドが高校を放校処分になった後に、クリスマス直前の冬のニューヨークの街を数日彷徨い、見るモノ、話す人に悉く“phony”（インチキ）と連発、その後たどり着いた自宅で最愛の妹フィービーに「(あなたは) 一体何がしたいの?」と問われた際に、「ライ麦畑のがけからそこで遊んでいる子どもたちが落ちないようにキャッチする、そんな人になりたい」と答えたという、言ってみればそれだけの話である。ところがここに、いくつもの複合的な関係性が張り巡らされているのでそこから『ライ麦』内に仕掛けられた、からくりのようなものを読み解いていくことにしよう。

ホールデンの動向や言動についてはすでに数多の先行研究があり、あえ

でそれをここでひとつひとつ検証するようなことは行わず、先行研究の研究のような繰り返しはしない。しかし、竹内康浩が記した2冊の研究書、『サリンジャー解体新書 『ライ麦畑でつかまえて』についてもう何も言いたくない』、『ライ麦畑のミステリー』はとても秀逸であり、本稿での考察も多分にこの2冊における竹内の論をもとにしているので、この2冊に限っては適宜、本稿でも援用して取り扱う。そして、改めてホールデンのフィービーに対する想い、視線、視点のようなものは本稿での論を展開するために重要であるので物語の進行に沿ってまずはここでまとめておく。

ホールデンからフィービーへの言及が初めてあるのは10章であり、ホールデンは「フィービーは一見の価値があるぜ。あんなにかわいい、あんなに利口な子は、君も生まれてから見たことがあるまいと思う」(106)と言っている。その後、幾度かエピソード的にフィービーの名を挙げるが、印象的なのは16章でホールデンが自然科学博物館に行った際の次の言及だろう。「昔僕が見たのと同じ物を、今フィービーはどんな風に見てるだろう。そしてまた。それを見に行くたびごとに、フィービー自身はどんな変わり方をしてるだろう。」(189)ここは、この直前で博物館にあるエスキモーを見て、それがいつも同じであると同時に、見ているこちら側が逆に同じでない、ということに触れている場面で、フィービーの成長、つまりはイノセントな世界から大人へとやがては「落ちて」ってしまうこと、に対するアンビバレントな気持ちの表れでもあると考えられる。それはその直後に「ものによっては、いつまでも今のまんまにしておきたいものがあるよ。そういうものは、あの大きなガラスのケースにでも入れて、そっとしておけるというふうであってしかべきじゃないか。それが不可能なことぐらいわかってるけど、でもそれではやっぱり残念だよ。」(189)と言っているところからもうかがえる。これはホールデンが時間の進行に何らかの抵抗感を示していることと言えよう。事実、ホールデンの時間の停止に関する感覚は竹内がこの場面とセントラルパークにいる魚について語る場面を引き合いに出し、その重要性を論じている(竹内『もう何も言いたくない』、

206-207)。

このように、21章で実際にフィービーと会話する前までは、ずっとホールデンからの一方的な、いわば回想的な、フィービーへの言及が続く（そもそもこの小説はホールデンのモノローグ的な体裁を取っているので必然的にそうならざるをえないという部分もある）。先に「見るモノ、話す人に悉く“phony”（インチキ）と連発」と書いたが、フィービーに対しての感情はまったく逆で、“nice”（よい）、表現を変えたとするなら「ポジティブ」、なことしか言わない。それは先にも引用したように、内面も外面も、どちらにしても、である。つまり、ホールデンの目にはフィービーという存在は、いわば「真・善・美」のように映っているように思える。その逆、「偽・悪・醜」を思わせる存在こそ、ホールデンをして“phony”と呼ばしうものとなる。そもそもフィービーに与えられた小説内での役割とは、竹内に倣うならば、Phoebeという名前そのものがギリシャ神話に出てくるポイベ（輝ける女）であり、小説の最後で青いマントを身に着けているのは聖母マリア的だという指摘は竹内以外にも複数ある（竹内『ミステリー』、24）。そう考えるとフィービーに対しては、一義的には物語においてイノセントな年下の妹という位置づけだが、ホールデンへの影響という点に関してはそれをはるかに通り越して、フィービーに対してどこか崇高な目線をホールデンが持っているのを読者がそれとなく感じるの、あながち行きすぎた推測ではないのであろう。

そして、20章の終わりで「彼女は僕にとっても好意を持っているんだから。好意って、つまり、僕のことをとても好きなんだよ。ほんとなんだ。とにかく、そのことが頭を離れないもんだから、しまいには僕は何を考えたかという、死んだりなんかしちゃいけないから、その前にこっそり家に帰って、彼女に会ったほうがいいと思ったんだ。」(242)と語り、21章でホールデンはフィービーに会うために自宅にこっそりと戻る。そして寝ているフィービーを起こして再会を果たす。その後23章までフィービーとの実際の会話的やりとりが続いていくことになるのだが、それらの章における場

面での両者間の「つかまえる」「つかまえられる」に関しては本稿においてとても重要なので、次の項でこれらの場面を詳しく論ずる。

2 「つかまえる」と「つかまえられる」

『ライ麦』において、「つかまえる」と「つかまえられる」が混然一体となってくるという論旨は、先に紹介した竹内の論に基づいている。竹内によれば、様々なアイテム、例えばホールデンがかぶっている赤いハンチング帽、野球のミットなどを含め、フィービーだけでなく死んだアリーらともそうした主客逆転現象、他者との入れ替わり、のようなことが起きているという（竹内『何も言いたくない』、47-60）。そう考えると21～23章でのホールデンとフィービーの会話と言動は、まさに彼らが入れ替わるかのようにうまく仕組みられている。まず、ホールデンは帰宅してフィービーの部屋に行き（実際にはここにいない）、その後兄であるD.B.の部屋で寝ているフィービーを発見、起こすと彼女は「そして僕の首やなんかに抱きついてきた。彼女はとても愛情がこまやかなんだ。つまり、子供にしてはまったく愛情がこまやかなんだよ。ときには、こまやか過ぎることがあるくらいなんだ。」(250-251)とホールデンに対して振舞う。竹内の論によると、基本「(相手に) 触れてはいけない」という暗黙のルールのようなものがこの小説には存在し、それを破ると結果ホモセクシャル的な疑惑を向けられてしまうアントリーニ先生のおかしなことになってしまう。しかし、と同時に「(誰かを) つかまえたい」、そして「(誰かに) つかまえられたい」というホールデンの心情からすると先の場面でフィービーを一時的に、その身体を「つかまえる」こと自体はホールデンの素直な願いに基づいた行動とも取れるだろう。つまり、ここでホールデンはフィービーを文字通り「つかまえている」のと同時にフィービーに「つかまえられている」ことになる。また、ホールデンがフィービーにあげようと思って買っておいたレコードを落として割ってしまい、その粉々になったレコードをおそろおそろ差

し出すと、これは再び竹内の指摘に肖るが、“I’m saving them”と言う（竹内『ミステリー』、66-67）。落ちて割れたものをsave（救う）するというこの一場面は、フィービーはホールデンの落ちて割れた心をsaveする存在であることを暗に示唆しているようにも思える。そして映画の話をしたりにしているうちに、フィービーはホールデンが放校になったことを察し、怒ってしまう。すねたフィービーに一方的に話しかけるホールデンではあるが、それを「彼女はひとが何かを話してきかせるときには、必ず耳をすまして聞く子なんだ。そして、おかしなことに、二度に一度は自分が知ってることをまた聞かされたりするんだけど、それでも耳をすまして聞いてんだからなあ。ほんとなんだ。」(260)といい、その姿勢を高く評価する。これはフィービーの共感力、empathy、の高さを示していると言えるだろう。それはつまり、ホールデンの心の声を聞くことが出来る存在ということにもなる。そして、22章の終わりで彼はフィービーに向かって「ライ麦畑のつかまえ役、そういったものに僕はなりたくないだよ。」(269)と語る。ここまでの流れでわかるように、フィービーはホールデンの内面の吐露の、実は唯一の、受けとめ役として機能している。そしてまた、フィービーはホールデンを複層的な意味においてsaveする役割を担ってのものである。

そして23章で母親が帰ってきた後、ホールデンは気づかれずに家を出ていこうとするのだが、フィービーはそれを止めようとし、かつ自分の持っているおこづかい（お金）をホールデンに渡そうとする。と突然、ホールデンはなぜか泣き出し、フィービーと半ば抱き合うような形になる。「僕が急に泣き出したもんだから、フィービーはすっかりたまげちまってね。僕のそばへ寄って来て、泣きやまそうとするんだけど、いったん泣き出したら、そう簡単にとめられるもんじゃないからな。泣きながら僕は、まだベッドに座ってたんだ。フィービーは僕の首に腕をまわすし、僕もまた彼女の身体に腕をまわしてたんだけど、やはり僕は長いこと泣きやむことができなかった。このまま息がつかまって死ぬかどうかするんじゃないかと思ったな」(279-280)。これは彼らの「入れ替わり」の儀式のようにも思える。

なぜなら、ここは再会後すぐの場面にもあったように、お互いを身体的に「つかまえている」「つかまえられる」状態であり、この後フィービーはホールデンっぽくなっていくからだ。25章でホールデンは西部に行こうと思い、その前にフィービーにさよならを言おうと待ち合わせをする。そこにやってきた際のフィービーの様子は以下のように描かれている。「とうとうフィービーの姿が見えた。入口のドアのガラス越しに見えたんだけど、どうしてそれがわかったかというと、彼女は僕のあのスットンキョウなハンチングをかぶってたんだよ — あの帽子なら、十マイルばかり先からだって、ちゃんとわかるからな」(319)。要するに、フィービーはあたかもホールデンのように、ホールデンのハンチング帽を被って彼の前に現れている。加えて、「もっと近づいてみると、それは僕の古い旅行鞆で、僕がフートンに行った時分に使ってた奴なんだよ。」(319)とある。これはつまり、先のハンチング帽に加え、彼の鞆を持つことでフィービーがハンチング帽のみならず、あたかもホールデンのような格好をして彼の前に現れているということになる。(竹内『ミステリー』、148-150)

その後二人は動物園を経由し、つかず離れず歩きながら回転木馬へとたどり着く。フィービーは回転木馬に乗る寸前、「僕のオーバーのポケットに手をつっ込んで、例の赤いハンチングを取り出して、そいつを僕にかぶせたんだ。」(329)とホールデンが再びホールデンらしくなるようなことをする。ここも、あたかも二人が入れ替わりの儀式をしているようにも思える。そして雨の中、回転木馬に乗るフィービーを見て、ホールデンは「フィービーがぐるぐる回りつづけているのを見ながら、突然、とても幸福な気持ちになったんだ。(中略)ただ、フィービーが、ブルーのオーバーやなんかを着て、ぐるぐる、ぐるぐる、回りつづけてる姿が、無性にきれいな見えたただけ。」(330)と幸福感を感じる。回転木馬に乗ってぐるぐる回るとするのは、先に述べた博物館でのシーン、「今のまんまにしておきたい」を彷彿とさせる。なぜなら、同じ場所をぐるぐる回るのはそこからどこかに行くわけでもなく、また時間がどこかへ経過するわけではない

ことを暗に示唆しているように読めるからだ。加えて、「無性にきれい」は最初に述べたホールデンが持つフィービーへの視線、「真・善・美」とも通底している。

ここまで物語を追って述べてきたように、ホールデンのフィービーに対する視線はまずは「真・善・美」という“phony”とは対極的なものであり、そして両者はあたかも役割を入れ替えるかのような形でお互いを「つかまえる」「つかまえられる」的な関係になる。そしてフィービーは直接的、間接的にホールデンを「救う」役割を果たしている、とまとめられるだろう。

3 「はげます」と「はげまされる」

ではここからは、一旦少しだけ『ライ麦』から離れて、「はげます」と「はげまされる」について簡潔に考察する。あえて左記のようにひらがなで記すのは「つかまえる」「つかまえられる」を意識してのことであり、一般論としての場合は漢字で記す。さて、「励ます」とは考えてみればおかしな日本語である。本来の語の成立過程からすると「励む」ように「させる」ので「励ます」であり、そこには使役の意味が含まれる。しかし、それほど「無理にさせる」意味は今日ではあまり感じられない。では「励ます」とはどういうことか。柳瀬真紀によると「励ましの本質とは心が動く何かに触れ、その人の中に「進んでいこう」と思えるエネルギーが生まれること」だという¹。つまり、何がしかの行動、ネガティブなものではなくポジティブな方向へ、の契機となる他者からの影響、あるいは（言語／非言語による）働きかけと言えるだろう。ただし、励ます側がそれを自覚的にやったかどうかよりも、励まされた側がそう感じたかどうかの方が重要な場合もある。というのも、上述の「する」「される」という関係性はほかにも、例えば「愛している」「愛されている」、などとも共通しているように思われるからだ。

1 2020年9月20日に行われたzoomでのオンラインイベント、「最初の一步と継続につながる -励まし力の探求-」での柳瀬真紀の発表資料による。

「愛している」という能動的な態度や行動、言葉を示したところで、それが相手に届くかどうかはわからない。逆に、何もせずとも相手が勝手に「愛されている」と感じることもあるだろう。これは、受け手側がどう感じるか、にかかっているとも言える。つまり、この「はげます」「はげまされる」、「つかまえる」「つかまえられる」といったような「する」「される」の関係においては、どちらかだけでは成立せず、両者がいて初めて成立すると言えるのではないだろうか。考えてみれば自明とも思われかねない点ではあるものの、本稿においては重要な点なのであえてここでこれを強調しておきたい。

加えて、こうしたどちらかだけでは成立しない関係性というものは、例えば合気道というスポーツを例にとりて考えてみるとわかりやすい。合気道では、技をかける人を「仕手（シテ）」、かけられる人を「受け（ウケ）」と呼ぶ²。これを上記、例えば「励まし」にあてはめると「励まし手（シテ）」と「励まされ手（ウケ）」がいることになる。基本、シテがどんなに強引にやったとしてもその技はうまくは決まらず、ややもするとただの暴力となってしまう。むしろ、ウケがうまくシテの技を受けとめてあげることで上手に決まる。再び「励まし」で考えてみると、その技（励まし）を受け入れるだけの技量、言葉と変えると状況や何がしかの理由、がウケの側にないとシテの技は決まらない（ただし、両者の「気」がうまく合わせられているとシテがあまりうまくなくてもウケがそれを受けとめて技が成立するように導くことは出来る）。よって、このシテ/ウケの関係、共通する「気」のようなもの、が両者の間にあることでもって「する」「される」の関係は成り立っていると言える。

上記を踏まえた上で、今一度この「する」「される」、「つかまえる」「つかまえられる」という関係性、を改めてホールデンとフィービーにあてはめて考えてみる。すでに述べたように、竹内はホールデンとフィービーの

2 執筆者が所属している養神館合気道系列乗木道場ではそう呼んでいる。詳しくは千野進の『はじめての合気道』（2015年）を参照。

関係性に「つかまえる」「つかまえられる」という相互補完的な部分を見出している。それは例えば二人が入れ替わるような動き、例えば赤いハンチング帽を被ったり被せたり、をしていることから具体的にわかる。また、ホールデンが最初にフィービーについて述べている箇所で示唆されるように、ホールデンはフィービーを“nice”とっていて、かつフィービーもホールデンに対して愛情を持っていることをホールデン自身も自覚している。そしてフィービーもホールデンの言動に影響され、赤いハンチング帽をかぶり、ホールデンの鞆を持って現れるなど、何がしかの影響を受けている。ある意味、実際の行動に出るという「勇気づけ」がなされたとも言えるだろう。つまり、彼らの間には「愛情」あるいは「(相互的な)信頼関係」、さらに言い換えるなら「気」、のようなものが存在しているがためにそうした双方への影響が起こるのだ。これは先の合気道の例で言うなら、「シテ」「ウケ」的な関係性が両者の間に存在しているとなる。それは、つまるところ、ホールデンにとってのフィービーは彼の心の「つかまえ手」になっているという意味でもある。そしてその逆も然りである。

ここでアメリカの心理学者コフォートの考えも援用してみたい。日本では和田秀樹がその考えを『自信がなくても幸せになれる心理学』などで紹介しているが、そこには誰もが求める3つのニーズがあるという。それは、「鏡自己対象」ニーズ、「理想化自己対象」ニーズ、「双子自己対象」ニーズ(和田、77)で、これらは共感力という言葉でまとめられる。「鏡」とは「この人だけは自分を認めてくれる。この人だけは注目してくれる。」(和田、77)で、自分をあたかも鏡のように映し出してくれる人を指す。「理想化」は「不安なときなど、「この人がいればなんとかなる」「この人がいるから大丈夫だ」と思える相手」(和田、78)で、「双子」は「自分に近い存在に感じることで安心感を与えてくれる人」(和田、81)である。これらの点を『ライ麦』の文脈にあてはめると、ホールデンはフィービーを「鏡」のような存在と信じ、かつ「理想化」の対象なので話に行き、共感を示す言葉を発してくれる「双子」のようにも思える。

また、「励まし」の類似概念である「勇気づけ」では、岩井俊憲によると相手にかける言葉そのものだけでなく、以下の4点、勇気づける人の態度、勇気づける人と勇気づけられる人の日頃の関係、言葉以外のノンバーバル（非言語的）・コミュニケーション、相手の関心に関心を持つこと（共感）、が重要であるという（岩井、48-49）。これら4点においても、勇気づける、づけられる両者の関係性が取り上げられているし、共感もキーワードになっている。そして、他者を勇気づける人にある6つの特質として、尊敬と信頼で動機づける、楽観的（プラス思考）、目的（未来）志向、聴き上手、大局を見る、ユーモアのセンスがある、という（岩井、76）。これらの項目をフィービーが兼ね備えているであろうというのは、先に物語に準じて見てきた通りではないだろうか。

それではここまで述べてきた「つかまえる」「つかまえられる」を「はげます」「はげまされる」に改めて置き換えてみる。励ましという行為を落ちたエネルギーを拾い集めて（つかまえて）元に戻すことと考えると、ある意味「出来ないかも」と思っていたことが「出来るかも」もしくは「大丈夫」へとシフトすることでもある。先の落ちて割れたレコードのことを思いだすと、意味じくもフィービーはそれを“Im saving them”と言ったように、割れてしまったものを救う、つまり「つかまえて」あげることでもあろう。もちろん、割れたものが元に戻るわけではないが、つかまえる、あるいは受け止める、ことでホールデンの心は救われる、つまりはげまされる、大丈夫と思える、となる。そうすると、「はげまし手」という存在は「つかまえ手」とパラレルに思えてくる。ただしここで一点、留めておきたいのは基本、「触ってはいけない」というところだ。竹内が何度も指摘しているように、ごく例外的な場合を除き、『ライ麦』では「触ってはいけない」というメッセージが幾度となく散見される（たとえば竹内『ミステリー』、152、あるいは『もう何も言いたくない』、114-125）。これを「はげまし」のコンテキストで考えると、直接的な手だしをしないで「見守る」こととも考えられよう。たとえば、何かが出来ない子がなんとか取り組ん

でいるものを、手だしをして代わりにやってしまったら、つまりその対象物に直接「触って」しまったら、それはもはや「はげまし」ではなくなってしまう。

このように、「つかまえ手」と「はげまし手」の行っていることを精査していくと、このふたつはその方向性、あるいはエネルギーの循環的な流れ、が相似形的に一致していることがわかる。ホールデンは、例えば最終場面の回転木馬のシーンでフィービーの存在そのものに幸福感を感じ、その姿から「はげまされて」いることからわかるように、それは心を「つかまえて」もらうことでもある。上述してきたように、はげまされる側はまず、はげます側の存在を「真・善・美」的に信じている。また、はげます側も相手に対して尊敬や信頼の念を抱いている。それがゆえに双方にはげます、はげまされるという感覚が生まれ、はげます側はもしかしたら自覚的ではないかもしれないが、結果として双方に歩みよるだけの「気」のようなものが存在しているわけで、その中で「つかまえる」ことと「つかまえられる」こと、そして「はげます」ことと「はげまされる」ことが循環していくのだ。

おわりに

本稿では、『ライ麦』におけるホールデンとフィービーの関係性に着目し、その行動や特徴を作品に沿ってまずは確認した。そしてその後、「つかまえる」「つかまえられる」という観点からより詳細に、21～23章を中心に吟味した。さらに、「はげます」「はげまされる」という関係を考察することで、その関係が「つかまえる」「つかまえられる」とパラレルであることを議論した。それは、言い換えればフィービーはホールデンを「はげまして/つかまえて/勇気づけて」もいるしフィービーもまたホールデンから「はげまされて/つかまえられて/勇気づけられて」もいるということでもある。本稿を通して論じてきたことは、結果として『ライ麦』におけ

るホールデンとフィービーの関係を研究することは「励まし」とは何かを研究する一助にもなり、また「励まし」とは何かを理解したければ『ライ麦』でのホールデンとフィービーの関係性から相似形的に考察することで理解が深まるという、ここでも『ライ麦』と「励まし」の間に「つかまえる」「つかまえられる」の主客逆転的の一体感が生まれているのではないだろうか。

参考文献

- J. D. Salinger, *The Catcher in the Rye*, Boston: Little, Brown, 1951. 『ライ麦畑でつかまえて』野崎孝訳、白水社、1984年。
- 岩井俊憲、『勇気づけの心理学 増補・改訂版』、金子書房、2011年。
- 竹内康浩、『サリンジャー解体新書 『ライ麦畑でつかまえて』についても何も言いたくない』、荒地出版社、1998年。
- 竹内康浩、『ライ麦畑のミステリー』、せりか書房、2005年。
- 和田秀樹、『自信がなくても幸せになれる心理学』、PHP研究所、2017年。

(本学法学部准教授)

